

## 10 鉄鏃に関する検討 ―分類基準の設定と県内出土資料との比較―

本節では河崎の柵擬定地から出土した鉄鏃について検討を加える。今回の検討においては古墳時代鉄鏃の研究を参考に河崎の柵擬定地出土資料の位置付けとともに県内における出土遺跡の把握と分類基準の設定を目的とする。ただし、古代～中世の鉄鏃についての研究は、古墳時代と比べてその数が少ないこと、加えて岩手県内では鉄鏃の出土点数自体がそれ程多くないことからその内容が判然としていないのが現状であることから、あくまで予察であることを先に述べておく。

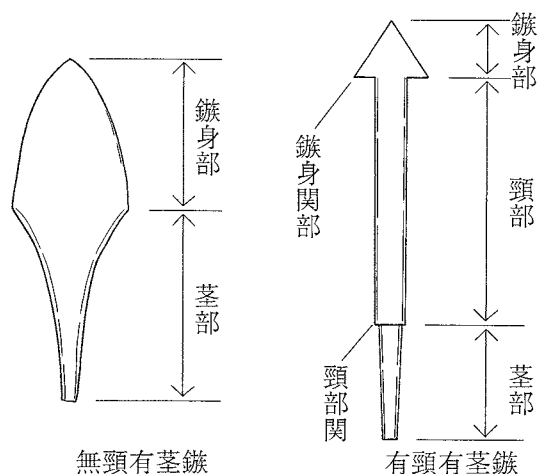
## 鉄鏃の分類基準について

最初に鉄鏃の分類基準について記しておきたい。第214～216図は、水野敏則による古墳時代鉄鏃の分類(水野2003)を参考として、岩手県内出土鉄鏃の形態を分類・模式化したものである。この水野による分類は、古墳時代中期における日本列島と朝鮮半島との鉄鏃型式の概要をつかむために考案されたものであり、簡便で汎用性がある。本稿は岩手県内出土の古代～中世の鉄鏃を対象としているが、県内出土資料の傾向をつかむことが最大の目的であり、その意味では水野の分類視点は多くの示唆を与えてくれるものであることから、今回はその分類に依拠して論を進めていくことにする。

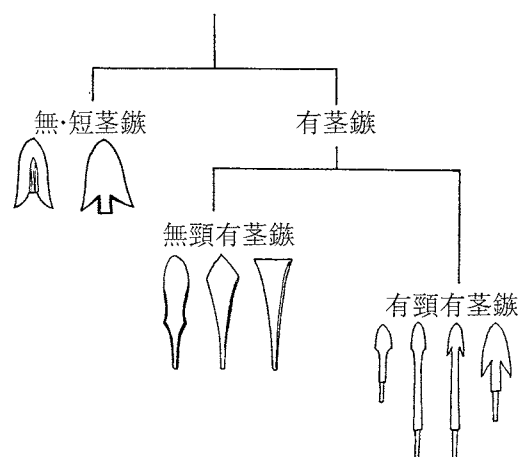
まず大分類としては矢柄への着装形態をもとに分類を行う。県内出土鉄鏃を概観したとき、それらは茎部(なかご)の有無を基準として無茎(短茎)鏃と有茎鏃のいずれかに分類される(第215図)。また、有茎鏃についてはさらに頸部(けいぶ)の有無によって無頸有茎鏃と有頸有茎鏃とに分類される。

その下位の分類(中分類)として鏃身部形態による分類を行う(第216図)。さらにその下位(小分類)として各部の細部形態による分類がある。本稿では基本的にはこの3段階の分類によって検討を加えていくことにする。なお、各形式の呼称については頸部・茎部の有無と鏃身外形の組み合わせにより決定する(例えば頸部を有する鏃身外形が三角形のものについては有頸三角形式とする)。また、有頸鏃の中で頸部長が長い(一般的には5 cm以上)ものについては長頸式と付けることにする。

なお、今回対象とした資料は錆化が激しく断面形などが判別困難な個体が多いため、比較的判別が容易な鏃身外形及び頸部関の形態を分類の中心に据えることとする。以下にその分類について簡単に



第214図 鉄鏃部分名称図



第215図 鉄鏃分類概念図(水野2003より転載)

記しておく。

#### ① 鍔身外形

- A. 三角形 鍔身長と鍔身幅がほぼ1 : 1になるもの
- B. 長三角形 鍔身長が鍔身幅より2倍程度あるもの
- C. 柳葉形 鍔身長が鍔身幅より2倍前後あり、さらに切先から関部にかけてほぼ直線的に垂下、あるいは鍔身中位で内側にくびれるもの
- D. 五角形 ふくらが強く稜をなす形状のもので、鍔身長と鍔身幅の比率により細分が可能
- E. 方頭形 切先が直線ないしは弧状で、平面形が逆台形となるもの
- F. 鑿根形 鍔身部断面形が長方形で、刃部が切刃造あるいは片切刃造のもの
- G. 鑿箭形 鍔身部と頸部の境が不明瞭なもので、鐔の有無によって細分が可能
- H. 片刃形 鍔身部の片側にのみ刃部が形成されるもの
- I. 雁又形 鍔身部がY字状に開くもの

#### ② 頸部関

- a. 角関 関部まで頸部が直線的に至るもので、断面形には正方形と長方形がある
- b. 台形関 茎部との境界付近で頸部が台形状に広がるもの
- c. 円形関 関部がリング状になるもので、環状関と呼称されることもある
- d. 棘状関 頸部との境界に方形の突起がつくもの
- e. 無関 茎部との境界が無く直線的に茎部へと至るもの

### 河崎の柵擬定地出土資料の検討

#### ①形態的特徴

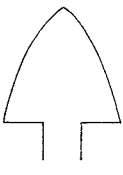
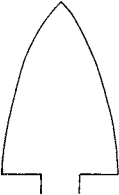


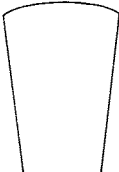



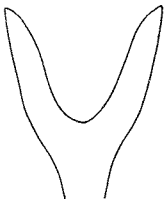
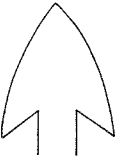
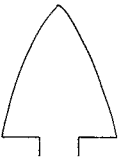
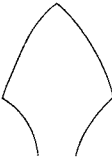

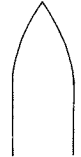






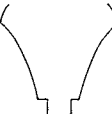



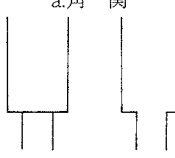
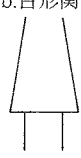
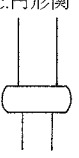
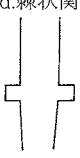

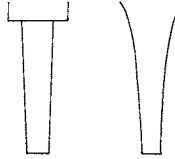
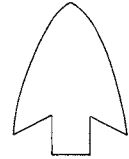




前項で記した分類基準をもとに河崎の柵擬定地出土資料の分類を行う。まず大分類では、有頸有茎鍔(5003～5008)と無頸有茎鍔(5010・5011)、無茎鍔(5009)が確認できる。中分類とした鍔身外形をみると、三角形・長三角形・鑿根形・雁又形の4種類が確認できる。また、有茎鍔のなかでも棒状頸部をもつ長頸式の鉄鍔が量的に最も多い。すなわち、本遺跡出土資料は、長頸式の長三角形式鉄鍔が主体となるという傾向が看取できる。

#### ②年代的位置付け

古代～中世における鉄鍔については研究事例が少なくその内容が判然としていない。その中にあって津野仁は東国を中心として当該期資料の分類と変遷を、飯塚武司は多摩川丘陵を対象として古墳時代後期～古代末期までの変遷を検討している(津野1990、飯塚1991)。鉄鍔の年代決定にあたっては古墳時代から継続する形式の有無、頸部関の造作、長頸式鉄鍔においては頸部の長短が指標となる。以下では、津野らの論考を参照しながら検討を加える。

5003は長頸三角形式に属するもので、頸部長は8cm、頸部関は角関である。頸部関の変遷について津野は、棘状関から角関へという変遷を考えており、棘状関の消滅を8世紀初頭頃(津野編年I期初頭、以下単に□期とする)としている(津野1990)。また、I期の長頸鍔は次第に短頸化する傾向にあり、頸部長は10cm程度のものから7～8cmのものへと変化するということである。これらを根拠にすると、5003はI期(8世紀初頭～9世紀前半)のなかでも棘状関消滅後から短頸化していく段階(8世紀中葉以降)に属するものと判断される。

5004・5005については無関であることから根拠に乏しい。無関であるため頸部と茎部の境界が不明瞭であるが、いずれも頸部は5003よりも長く10cm程度になると考えられる。先述の通り、長頸鍔はI

鏃 身	鏃 身 外 形	A.三角形 	B.長三角形 	C.柳葉形 	D.五角形 	E.方頭形 
		F.鑿根形 	G.鑿箭形 	H.片刃形 	I.雁叉形 	その他
	鏃 身 関 部	a.腸 袂 	b.角 関 	c.撫 関 	d.斜 関 	e.無 関 
		1.両鑄造 	2.片鑄造 	3.両丸造 	4.平 造 	5.平片刃造 
	断 面					
頸 部	頸 部 の 有 無	A.有頸(棒状) 	B.有頸(その他) 	C.無 頸 	断 面	1.正方形  2.長方形 
		a.角 関 	b.台形関 	c.円形関 	d.棘状関 	e.無 関 
茎 部	茎 部 の 有 無	A.有 頸 	B.短 茎 	C.無 頸 		
		1.正方形 	2.長方形 	3.円 形 		
	断 面					

第216図 岩手県内出土鉄鏃分類模式図

期のうちに頸部が短くなり、また片刃式などではⅠ期後半から無関のものが出現するというのである(津野1990)。鍔身部を欠損しているため推定の域をでないが、残存部の状況を考慮するとⅠ期後半(8世紀後半～9世紀前半)に位置づけられる可能性がある。

5006は雁又式である。関部は台形関で、茎部は完存長で8cmである。鍔身外形は残存部の観察から二股部の挟りはやや深く、刃部下半がほとんど膨らみをもたないタイプと推定される。津野によると、二股部の挟りが深く刃部下半が膨らまないものはⅠ期前半に出現し、Ⅱ期末頃までに刃部下半の膨らみが増していくということである。また関部をみると台形関はⅢ期に激減し、以後円形関が主流となるということである(津野1990)。以上を根拠にすると、5006はⅠ～Ⅱ期(8世紀初頭～11世紀後半)に属すると考えられる。ただし、8世紀代の事例は挟り部が鋭角的であること、津野・飯塚両氏が11世紀代としている事例はいずれも刃部下半が膨らんでおり、茎部長が10cm以上であることを考慮すると、Ⅰ期後半～Ⅱ期前半(8世紀後半～10世紀)に限定できる可能性がある。

次に5007・5008についてみていく。5007は津野分類による長三角形Ⅲ式に分類される形式であり、広根式といわれる形式の代表的事例といえる。腸挟は深く、頸部関は角関である。5008も長三角形式であり、刃部先端を欠損しているが5007と同じく腸挟の深いタイプである。津野・飯塚両氏の論考で例示されたものを見る限り、腸挟が深く頸部関が角関のものはいずれも9世紀に比定されていることから、これらもⅠ期後半～Ⅱ期前半(9世紀代)に属するものと考えておきたい。

最後に鑿根式(5010・5011)についてみていく。5010は鍔身部が3.5cmと短く、関部は台形関である。鍔身部が極端に短いことから、平面形態のみをみると鑿根Ⅱ式(V期=15～16世紀前後)に該当する可能性がある。しかし、5010の鍔身断面形をみると、先端は三角形であるがそれ以下は関部まで長方形であり、関部までの鍔身断面形が三角形である鑿根Ⅱ式とは異なる。したがって5010については極端に小型化した鑿根Ⅰ式と考えておきたい。ただし、頸部関がⅢ期に主流となる台形関であることと、小型であることから鑿根Ⅰ式のV期に位置づけられる可能性はある。5011については、関部以下を欠損しているため判断根拠に欠ける。ただし、5010と異なり鍔身部は残存長で5cmあることから、鑿根式の中でも5010よりは古いと考えられる。

### 県内出土事例との比較

本項では県内出土事例との比較を通じて本遺跡出土鉄鍔の位置付けについて考えていく。岩手県内において古代～中世に属する遺跡のうち、鉄鍔が出土している遺跡は管見では集落・古墳・城柵・城館・生産遺跡など約80遺跡にのぼる。最も多いのは集落で、全遺跡の約8割を占める。遺構としては竪穴住居が最も多いが、一遺構あたりの出土点数が多いのは古墳である。次に具体的事例を挙げながら本遺跡との比較を行うこととする。

まず7世紀代の代表的事例として、矢巾町藤沢狄森5・14号墳出土例がある(第217図)。14号墳主体部からは有頸三角形式・有頸鑿箭式・無茎長三角形式が出土している。有頸鍔はいずれも頸部が短く、関部は角関と思われる。鑿箭式は両鎚造である。無茎長三角形式は鍔身幅が狭く腸挟が外方に開くタイプである。有頸鍔は7世紀中葉～後葉と考えられるが、無茎長三角形式は7世紀前葉に比定できる可能性がある。

5号墳主体部からは有頸三角形式と有頸鑿箭式が出土している。いずれも14号墳出土例に比べて頸部が長く10cmを超えるものが多い。関部は角関と考えられる。関部の造作および頸部長から7世紀中葉～後葉と考えられる。

同じく7世紀代のものとして遠野市高瀬Ⅰ遺跡2号墳周溝出土例がある(第218図上)。有頸三角形

式・有頸片刃式・有頸鑿箭式の3種類が出土している。有頸三角形式は、幅広で腸袂があるものと鏃身部が小型で鏃身関部が角関または斜関のものがあるが、前者は1点のみしか確認されていない。有頸片刃式は鏃身関部が撫関または斜関である。いずれも頸部長は8cm前後で、頸部関は角関または無関と考えられる。年代は藤沢狄森5号墳とほぼ同時期か、若干頸部が短いことを考慮するとやや新しくなるものと思われる。

山田町房の沢古墳群では7世紀～8世紀前半の古墳が確認されている。このうちRT04古墳からは7点の鉄鏃が出土しており、有頸長三角形式・有頸五角形式・無茎五角形式が確認できる(第218図下)。有頸長三角形式は腸袂が深く、頸部関は棘状関である。五角形式の鏃身関部は腸袂があるものと角関のものがある。年代については五角形式が主要組成に入っていることと棘状関のものがあることから、I期の直前段階(7世紀末頃)のものと考えられる。

盛岡市志波城跡では、城柵存続時期より新しい時期の竪穴住居を中心に鉄鏃が出土している。とくにSI389では有頸三角形式・有頸長三角形式・有頸鑿根式が一括状態で出土しており、この時期の鉄鏃組成を考えるうえで良好な資料である(第219図上)。ほとんどが長頸式の鉄鏃であり、鑿根式が主体となる。有頸三角形式には鏃身部が小型のもの(津野分類三角形I式)と大型で腸袂が深いもの(三角形Ⅲ式)があるが、後者は1点のみしか確認できない。頸部長は10cm以下で、頸部関は角関または撫関である。年代は、8世紀初頭に消滅する棘状関とⅡ期後半(10世紀以降)に出現する台形関が確認できないこと、8世紀代とされる事例よりも短頸であることから、9世紀代と考えられる。

宮古市島田Ⅱ遺跡は鉄器生産拠点と考えられる遺跡で、調査区全体で30点以上の鉄鏃が出土している(第219図下)。本遺跡では有頸長三角形式・有頸片刃箭式・方頭式・雁又式が確認されており、長頸式の鉄鏃が主体となるということである。また、関部の造作をみると角関か台形関に限られており、棘状関や円形関は確認されていない。年代としては、9世紀後半～10世紀代と考えられている。

以上、県内における代表的な出土事例を概観してきたが、ここで河崎の柵擬定地出土資料との比較を行っていくことにする。まず7～8世紀の事例と比較してみると、この時期の主体形式となる片刃式・五角形式・鑿箭式は本遺跡では出土していない。頸部長は各遺跡ともそれ程大差ないが、頸部関をみると本遺跡では棘状関のものは確認できない。棘状関が皆無であるという点を考慮すると、本遺跡の鉄鏃は藤沢狄森5・14号墳、高瀬Ⅰ遺跡2号墳、房の沢RT04古墳よりも後出の特徴を備えているといえる。

続いて9～10世紀の事例と比較してみる。まず志波城跡SI389と比較してみると、若干比率の差はあるが、長頸式鉄鏃主体に広根系鉄鏃が加わるという構成は同じである。細部形状をみても頸部長が8～10cm前後、頸部関に棘状関がなく角関主体であるという点で類似点は多い。次に島田Ⅱ遺跡と比較してみると、鏃身外形の形式はほぼ同じだが、島田Ⅱ遺跡では無茎式が多く大型のものが多い。また、長頸式のものについては台形関のものが存在するという点が本遺跡とは異なる。

以上のようにみていくと、本遺跡出土資料は志波城跡SI389とほぼ同時期と考えるのが妥当といえる。とくに長頸式鉄鏃については頸部長が10cm以上のものから8cm前後へと短くなり、それに伴って関部も棘状関・角関(藤沢狄森・房の沢)→角関(志波城)→角関・台形関(島田Ⅱ)と変遷しており、その変遷のなかに位置づける限り、本遺跡の鉄鏃は志波城跡SI389出土資料と近接した時期に位置づけることができる。

ただし、本遺跡の資料は遺構一括資料ではないことと、雁又式など一部のものについては島田Ⅱ遺跡出土例と同時期とも考えられるものが存在することから、個別事例では年代が前後するものもある。この点については今後形式ごとの変遷をたどっていくなかで検討すべき課題といえる。

### まとめ

本節では河崎の柵擬定地出土の鉄鏃について比較資料をまじえて検討を加えてきた。最後にその特徴を列記してまとめとしたい。

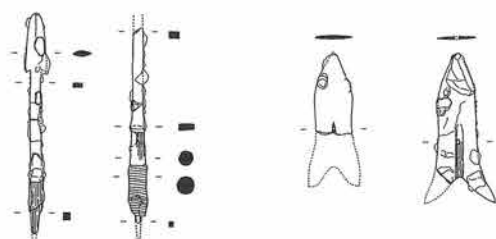
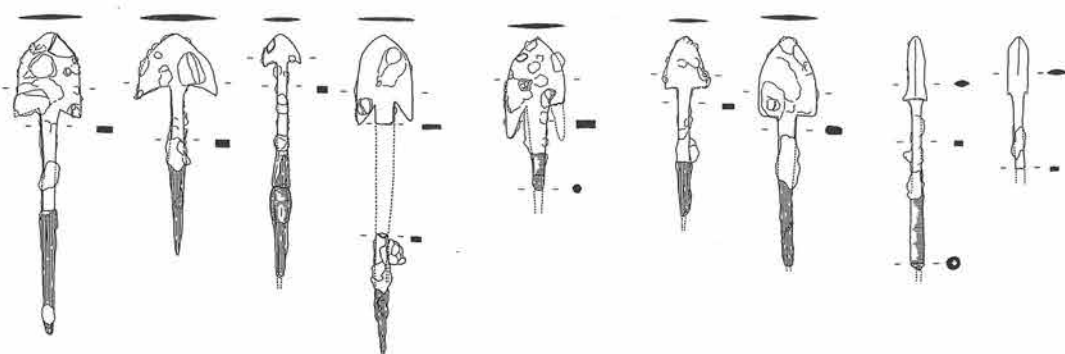
組成…鏃身外形には三角形・長三角形・鑿根形・雁又形があり、長頸式鉄鏃を主体として若干の短茎・無頸式が加わる。

年代…おおむね津野編年Ⅰ～Ⅱ期前半（8世紀～10世紀）のもので構成される。なかでも8世紀後半～9世紀代に位置づけられるものが多い。

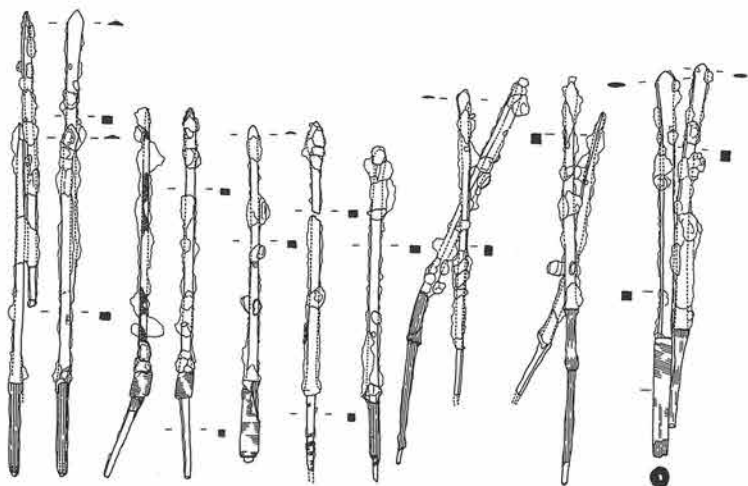
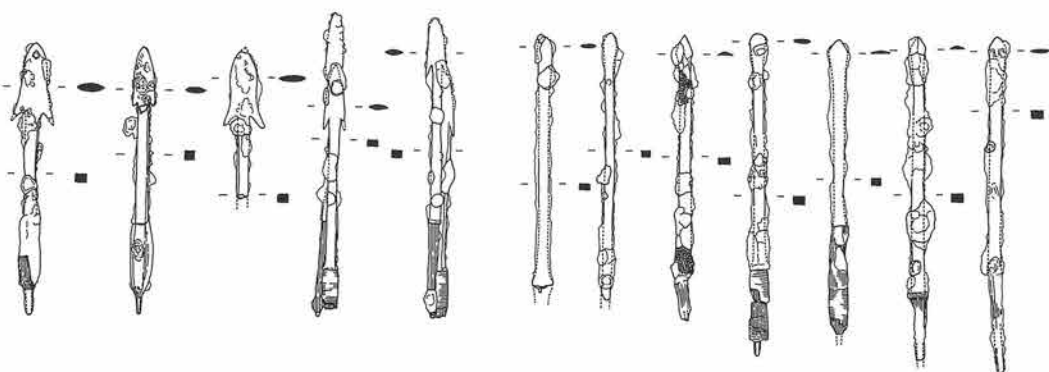
以上のような結果となった。ただし、先述の通り岩手県における古代～中世の鉄鏃については不明な点が多く、今回の検討でも判断根拠に乏しい点が数多くあった。今後は各遺跡出土資料の集成および他地域との比較を通じてその内容を再検討していく必要がある。（村田）

### 参考文献

- 飯塚武司 1991 「鉄鏃 - その時代性と地域性 -」『研究論集Ⅹ - 創立10周年記念論文集 -』  
東京都埋蔵文化財センター
- 小山内透 2004 『島田Ⅱ遺跡第2～4次発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第450集
- 津野 仁 1990 「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』第54号 物質文化研究会
- 西野 修 1986 『徳田遺跡群詳細分布調査報告書 - 藤沢狄森古墳群の発掘調査 -』矢巾町文化財報告書第8集
- 水野敏則 2003 「古墳時代中期における日韓鉄鏃の一樣相」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
- 室野秀文他 1982 『志波城跡 昭和56年度発掘調査概報』盛岡市教育委員会
- 佐々木清文他 1998 『房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第287集
- 佐藤浩彦 1992 『高瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡』岩手県遠野市埋蔵文化財調査報告書第5集



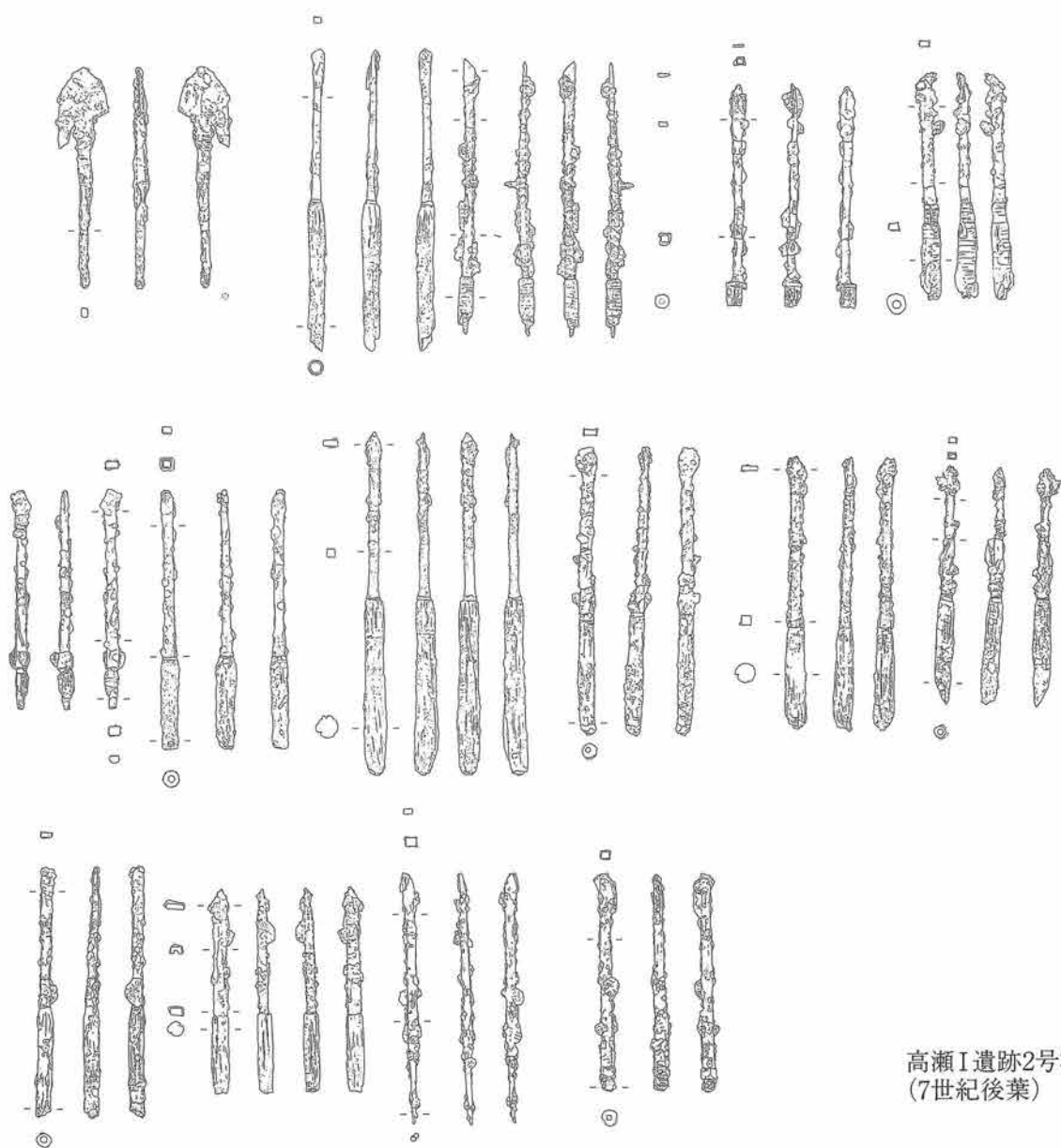
藤沢狄森14号墳  
(7世紀中葉～後葉)



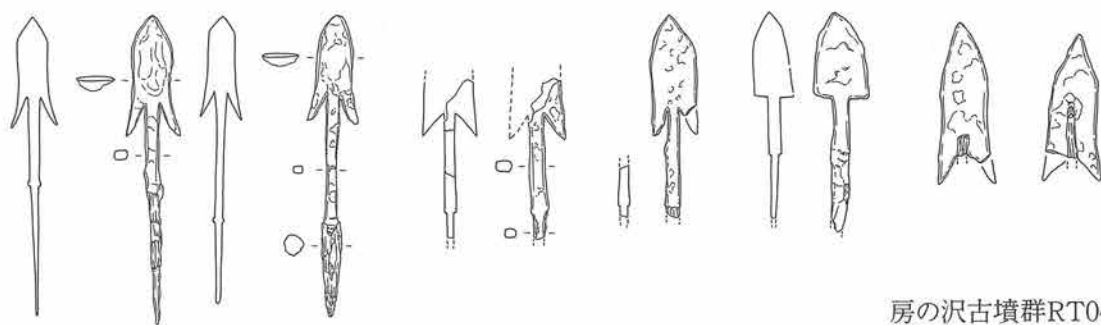
藤沢狄森5号墳  
(7世紀中葉～後葉)

縮尺1/4

第217図 岩手県内出土鉄鏃の諸例①



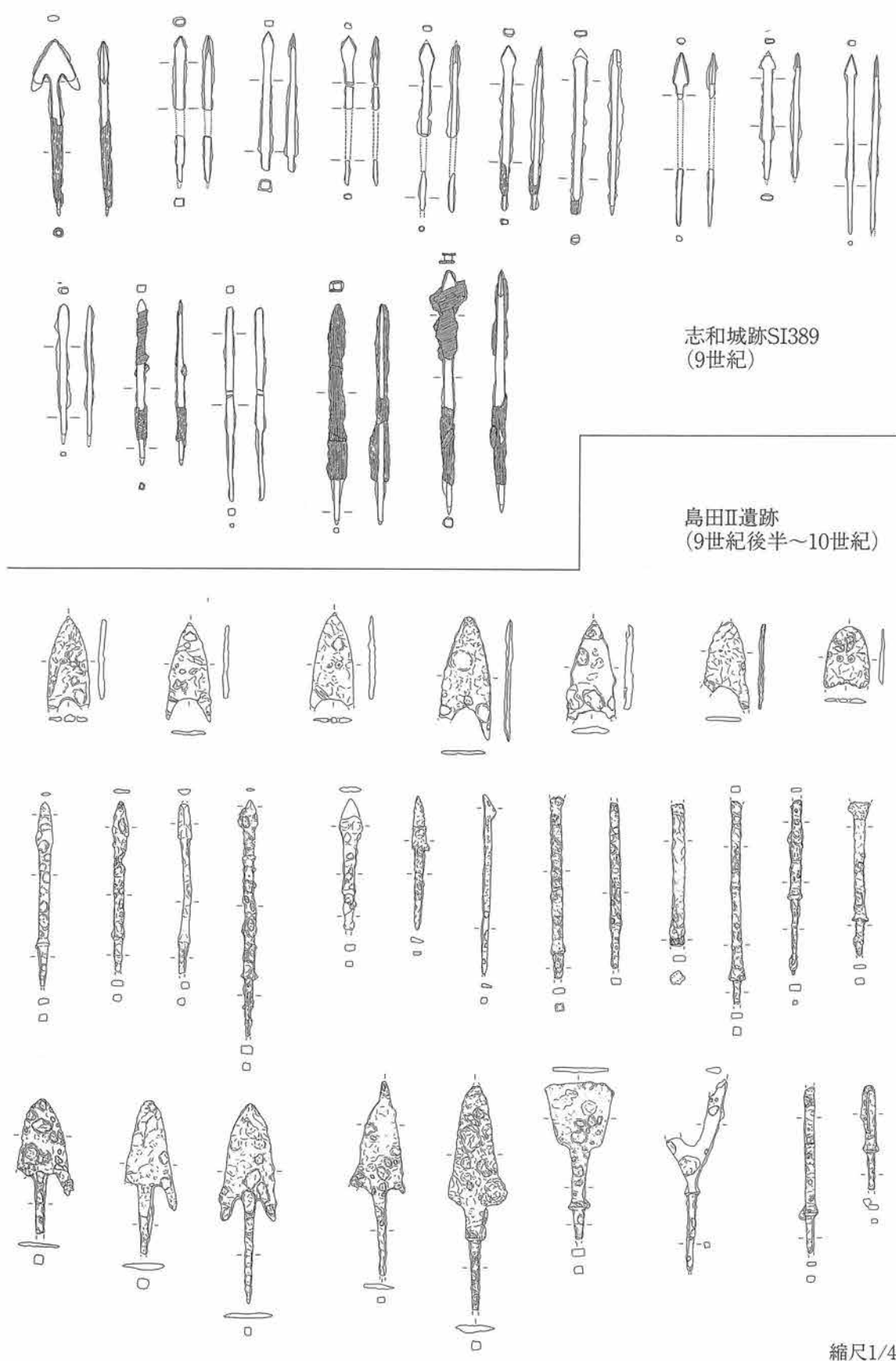
高瀬I遺跡2号墳  
(7世紀後葉)



房の沢古墳群RT04  
(7世紀末)

縮尺1/4

第218図 岩手県内出土鉄鏃の諸例②



第219図 岩手県内出土鉄鏃の諸例③